

第6章

第63回

日米学生会議概要

第63回日米学生会議概要

【第63回日米学生会議テーマ】

知ることから創ることへ ～対話と挑戦から共に描く未来～

-Question, Engage, Build: Collaborative Effort to Make a Difference-

日本では近年、若者が「受身」になってきている現状が危惧されている。日本人の海外留学生の数は、10年前のわずか3分の2に減り、若い世代の興味が外から内へと推移していることが明らかである。しかし、日本と他国の相互依存関係はますます深まり、言語、文化、生活習慣等が異なる社会で、確固たる自分を持ち、グローバルに活躍できる人材が求められている。こうした中、我々学生が担っていくべき役割とは何なのだろうか。日米学生会議は日米両国から志の高い学生を集め、1ヵ月という時間をかけて自らの役割を模索し、その実現に向けて第一歩を踏み出すことを目指した会議である。

第二次世界大戦終結から65年、日米の役割は安全保障問題や経済問題など多方面で世界における重要性を増している。自衛隊と米軍との連携の強化はアジア諸国からも大きな注目を集め、またTPPやFTAの締結により日本が市場開放を図り、他国との経済連携を推進することが期待されている。しかし、沖縄の米軍基地移設問題や、自由貿易化の流れの中でいかに国内産業を強化し、日本経済を再生するかなど課題も多い。

そのような中開催される第63回日米学生会議では、歴史から学べる点をどのように未来に活かすのかということに重点を置く。過去を振り返り反省することも大切だが、最大の課題はその反省をどのように今日の課題に活かし、新たな未来を創っていくのかである。参加者は本会議の事前活動を通し知識を深め、背負う肩書きがない学生同士、心をさらけ出して議論をする。価値観の対立や言葉の壁に挑戦しながら、自分自身の考えを整理し、

我々を取り巻く多様な問題に対する解決策を学生の視点で協議することができる。また、本会議を終えても引き続き海を越えた仲間とどのように変革を起こし、未来を切り開くのか追求していく。議論の中での対立を乗り越え、自分の意見を「自分たち」の意見へと再構築できたとき、また、仲間を思いやることを通して自分を見つめ直すとき、参加者は自らの成長を実感することができる。短時間では解決できない問題が混在する今日、我々学生が両国の一翼を担い、切磋琢磨しながら将来を見据えた腹藏ない対話をする意義は大きいと確信している。この会議を通し、参加者一人一人が様々な衝撃を受け、好奇心と向上心を持って常に挑戦し続ける者となることを期待している。

【主催】

財団法人国際教育振興会

【企画・運営】

第63回日米学生会議実行委員会

【開催期間】

2011年7月28日～2011年8月21日

【開催地】

第1開催地 <新潟県>

第2開催地 <京都府・滋賀県>

第3開催地 <沖縄県>

第4開催地 <東京都>

【会議の過程】

第62回日米学生会議の参加者から選出され、発足した実行委員会が、日本側主催団体の財団法人国際教育振興会、米国側の International Student Conferences(ISC), Inc の支援の下、本会議開催のための準備活動を行う。4月に参加者決定後、各参加者は所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、5～7月の期間には、自主的に講演会や勉強会、合宿などの事前準備を行い、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各36名、合計72名の学生が約1ヵ月に渡って共同生活を送る。本会議の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、自ら提案した議題について議論するスペシャルトピック、様々な文化体験、そして最後に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者は7つの分科会に分かれ、第63回日米学生会議として学生だからこそ可能である「心の対話」を行い、国境を越えた相互理解を推進したい。また、フィールドトリップでは、アカデミックな知識を得るのみならず、各地の文化に触れる活動を行うなど、各自の視野を広げ、討論と対話の充実を図る。さらに、学生同士の討論に止まらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会に向けて発信する。本会議終了後には、参加者は会議において得られたもの、そして1ヵ月の結果を、報告書また報告会という形で外部へ発信する。会議で得られた成果が長期的に社会貢献、社会還元されることを期待している。

【本会議におけるプログラム】**《分科会》**

本会議においての活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方5名ずつの学生（実行委員1名を含む）が、本会議期間中を通じて議論を重ねることとなる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪

問するなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。なお、第63回会議における分科会は以下の通りである。

- (1) Security; Strengthening Ties Between Nations Throughout Comprehensive security
：安全保障と日米
- (2) Ethics of Technology
：科学・技術の発展と倫理の再考
- (3) Continuity and Change in a Globalizing World
：グローバル化と世界システム
- (4) Media in Shaping Social Preconceptions
：変わりゆく社会とメディア
- (5) Cultures and the Environment; Micro Approaches towards a Global Issue
：文化と環境問題～解決への第一歩～
- (6) Interpretations of History in International Relations
：歴史認識問題と国際関係
- (7) Minorities in Modern Society
：差別から考える平等

《Site Research & Reflection》

各開催地における Site Theme に基づき、参加者は開催地ごとに4つのリサーチグループを作る。リサーチグループは事前活動として歴史、文化、社会などのリサーチを行う。本会議では、開催地到着の初めに、リサーチの結果につきプレゼンテーションを行い、開催地に対する知識を全員と共有することで、Site Theme に対する問題意識を深める一助とする。開催地出発の前日には、Site Theme を中心とし、参加者の学んだことについて共有する機会を設ける。

《Field Trip》

分科会の議題や各開催地に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO 及び研究所などへの訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることのできる貴重な機会であり、議論のた

第6章 第63回日米学生会議概要

めに必要となる多様な視点を得るための重要な活動となる。

« Special Topics »

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、異なる視点からの議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見及び議題設定能力を養うと同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

« Conference Wide Discussion »

分科会では扱わないテーマを対象とし、日米学生会議アラムナイや専門家の方々をゲストスピーカーとして招き、第63回日米学生会議テーマ、各開催地のサイトテーマに基づいたディスカッションを行う。これにより、参加者の見識を広め、新たな課題や視点を発見することを目的としている。

« Conference Wide Reflection »

参加者が一同に集い、1ヵ月の共同生活や、会議中に感じるであろう、議論の違いから生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開

き、自ら思うことを率直に語り合うことによって、それぞれの中に「共鳴」が生まれ、相互理解のための手助けとなることを期待している。また、他者を理解する場を通して、より充実した会議に向けての姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

« Forum »

第63回の各開催地の Site Theme に沿って随時行われる。第一線で活躍する専門家や有識者の講演、または学生を交えたパネルディスカッションなど、参加者がアカデミックな経験をすることを目的とする。

« Final Forum »

最終開催地において行われるファイナルフォーラムでは、1ヵ月の総まとめを行う。主として1ヵ月間を通しての分科会ごとの成果の発表を行い、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの視点を来場者の方々と共有することによって、第63回日米学生会議において得られた、学生達の成果や発見を社会に発信する。